

幼児教育における芸術表現の必要性を探る(1)

— J. デューイの視点から芸術と表現について —

On the Necessity of Artistic Expression in Pre-School Education (1)

— In Reference to Art and Expression in the View of J. Dewey —

足 立 広 美

Hiromi ADACHI

1 はじめに

本研究の目的は、デューイ (Dewey, John) の芸術論、経験論、表現論を理解することによって、幼児教育で行われている芸術表現活動の重要性を探っていくことにある。

デューイが教育活動を行う上で最も重要としていることは、幼児の本性の法則を知ることであり、その法則とは、幼児の発達を受動的側面よりも能動的側面のほうが先に立つものであると述べている。そして、そのうちの表現は能動的側面から表れるものであるとの見解を出している。また、幼児の様々な経験が活動的性質を有する種類のものであるとし、教育が経験に関するものであり、表現は経験に関するものであり、教育は表現に関するものである、つまり、デューイは、教育活動は芸術表現活動によってその活動が実り豊かになるという論理展開を導き出している。

幼稚園教育は幼稚園教育要領に則り、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域のねらい及び内容に沿って総合的な活動が行われており、この表現活動においても「表現」以外の他領域と密接にかかわっていると考えられている。

ところで一般的には幼児教育における表現活動は多くの現場で行われている。しかしなぜ表現活動が行われているのかを問いかけても答えられる人は少ないであろう。そこで、本研究ではまずデューイの芸術、経験、表現論を学び、哲学的な視点から、幼児教育における芸術表現活動の必要性を探求していきたいと思う。

2 デューイについて

まず、デューイの生まれた時代背景や、またなぜ筆者がデューイの理論を取り上げたか、その動機を論じてみたいと思う。

デューイは1959年アメリカで誕生した哲学者および教育者である。デューイの生まれた時代は、アメリカの社会的・文化的諸条件が革命的な変化と発展との過程にあった。彼の生まれた直後に起こった南北戦争では、アメリカの産業革命と資本主義の発展とによって決定的に重要な意味を持ち、この戦争が農業国アメリカを、世界最高の工業国へと急激に変化させたといわれている。そしてこのようなさまざまな時代背景の中で培われたデューイの人間性が、科学、経済、社会と向き合い、一つ一つこれらの諸問題に真剣に取り組んだ結果がデューイの思想、哲学を生み出したといわれている。また、デューイは人間を歴史的、社会的存在としてとらえており、まさにデューイが現実社会を生き、そして移り変わる時代を見てきた結果が人間を歴史的、社会的存在としていくきっかけになっていったのではないかと考える。

デューイの著作には「学校と社会」「哲学と改造」「民主主義と教育」「人間性と行動」「哲学と文明」「誰でも信仰」など多くの哲学書を残している。その中でデューイの哲学は「話し合いの哲学」とも言われている。日本の研究者がデューイについて、対話を重んじ、現実の価値創造を重んじたと述べている。そして、知識以上に知恵を大事にして、観念以上に実践を大事にした人

物でもある。このようにデューイは常に自らが行動に移す中で様々な思想を生み出していったのだと推測する。

またデューイは、平和主義者としても有名である。デューイの生きた時代は、20世紀最大の殺人者といわれるヒトラーが強烈な権力をふるってユダヤ人を殺し続けていた時代でもある。このような時に、デューイはユダヤの血をひく研究者を自分の研究所に招き入れ、かくまうとされる。そして教育においても、当時は大人用の聴講用の机、椅子しかなく、子どもには大きすぎるものしかなかったのだが、自分の教える子どもたちの使用する子供用の机、椅子を見つけるために、シカゴの町を探し回った。この時デューイは、かなりの年齢になっていたといわれる。しかし子どもたちのためなら自身の足を運ぶことをなど意に介すことなく、プライドなどかなぐり捨てての行動であった。このことをもってしても子どもの視点で教育を考えた人であることは間違いない。筆者はこのデューイの人間性に惚れてデューイを学ぶきっかけを作ったが、デューイの思想に対しては様々な長所もあれば、短所もあるといわれている。しかしどこまでも子どもたちのために心を、身体を尽くしたデューイの理論から、まずはデューイの芸術、経験、表現に関してどのような見解を出しているのか探求してみたいと思った。そしてその見解が幼児教育における芸術表現に関してどのような必要性があるとされるのか考察してみたい。

3 デューイの理論

ここではデューイの芸術、経験、表現に関する理論を挙げ、幼児の芸術表現に関する論理展開を学んでいきたい。

(1) デューイの芸術論

デューイは、芸術 (product of art) の概念について次のように述べている。「芸術は為すこと、為されたことの一性質 (a quality) である。それ故、ただ外面的にのみ、芸術を名詞として指示することができるのである。芸術は為すことと内容に付着しているため、その本来の性格からみれば形容詞的である」これは物を作る、楽器を奏でる、文章を書く、計算をする等、これらが芸術であるか否か、あるいは一般的に言われる芸術的活動の結果としての事物を受け止める側のものが、それを芸術として認識、鑑賞するか否かはそれらの活動と作品の中に芸術的性質が宿っているか否かによるという意味である。つまり、一般的には美術作品は出来上がった「絵」のことを芸術というし、ピアノの演奏会でも当日どのように演奏したかで、芸術であるか否かを評価されてしまう。しかしデューイは、活動と作品の中に芸術的性質が宿っているかどうか、これは作品を作り上げるまでに、どのような精神で作り上げたかという、作品を作り上げる過程のことを芸術と述べているのである。また、美術や音楽を作り上げる過程のみを芸術としているのではなく、デューイの理論によれば、文章を書くことも、計算をすることも、人間が何かを作り

上げようとする過程に、どのような思いで、そしてどのような精神で作り上げるのか、すべてにおいて作品を作り上げる過程での心、精神で芸術であるか否かが決まってしまうのである。

またデューイは、「絵画と音楽、すなわち造形芸術と聴覚芸術は、学校で行われるすべての作業の頂点であり、洗練、純化の極点である」と述べている。文章を書くことも、計算をすることも人間が作り上げる過程が芸術的性質を宿っていれば、すべて芸術という見解を出していたデューイだが、様々な人間の作り上げる芸術がある中で、その中でも絵画や音楽が頂点になっていくという理論は、とても意味のある言葉であると考えている。そしてルネッサンスの芸術の例を通して、生活に即した技芸から発生し、発展したものであるから偉大であったと述べている。まず、これは芸術というのは、妄想や非現実世界を描いたり表現することではなく、日常の生活を通して作り上げられるからこそ本当の芸術という意味なのであろう。確かに文章を書くこと、計算をすることなどデューイの例を出すすべての芸術が日常生活から生まれているものである。また反対に、作品を作り上げる心根が自己の利益のためや、職人流の狭い精神では芸術は不自然になり、空虚になり、感傷的になりがちであることを述べており、この理論からは本来の芸術とは人間の生きる社会との密接なつながりから完成するといっても過言ではないし、例えば民衆が素晴らしい芸術作品であると認めた絵画であったとしても、この絵を作り上げる過程が自己満足や金銭を求めるだけの絵画であれば、これは芸術とは言わないのである。そしてデューイは、芸術は身体の諸器官、眼と手、耳と声とを働かせるものであるが、芸術はそうした表現の器官が要求するようなたんなる技術的熟練を越えたものであるとし、芸術は他の活動に深さと豊かさを与えると述べている。また、デューイ研究者である小川哲生⁶⁾は、デューイの芸術に関する見解として、このような芸術は、人種、性別、宗教、時代等のあらゆる壁を破って人々に強烈な共通の美的経験をもたらし、感動を与えていると述べている。つまり、人に感動を与えるものとは、作る過程に様々な困難や壁を乗り越えて作り上げるものだからこそこのような素晴らしい作品が出来あがっていくのではないか。そして、幼児教育における芸術においても、デューイの言う芸術 (product of art) 活動を行うことによって様々な成長を遂げていくものであると考える。

(2) デューイの経験論

デューイは幼児のすべての活動において、「経験」が人間的成長を促すと述べている。

そしてまた、芸術も経験から様々な作品が生まれるとしている。そこで、デューイの「経験」について言及する。

デューイは「経験」について次のように述べている。

「経験」には経験におけるたてとよこの面として考えられているところの「連続」(continuity)と「相互作用」(interaction)の2つの原理を挙げている。「連続」については、たとえば幼児が制作作業で粘土を作ろうとする。その粘土の形までは想定しないが、その粘土を作るのに一生懸

命作るが、その作品が完成するまでには困難や苦痛をとめない、その状態は幼児の精神的圧力をも与えることになるかもしれない。しかし、その粘土が完成した瞬間には達成感を味わう。そしてその時にはじめて精神的苦痛から解放され、なんともいえない感情を感じることができる。このような経験には、はじめと途中と終わりがあり、この苦痛から解放にむかう経験こそが人間の生きる価値を作っていく。そしてこのような連続した経験の積み重ねの中で、幼児は成長を遂げていくのである。

また「経験」の具体的側面についてデューイは「ある事物は他の或る事物に対しては無感覚、無反応、不快であるが、別の事物に対しては機敏、熱心、攻撃的であり、第3の場合には、受容的で、従順である」と述べている。これを例えとすると、ある教師が幼児に何かを教えようとする。1つ目の反応は教師の教授に対して全く理解できないことから、無関心、無反応になる。2つ目の反応は、教師の教授に対しては理解できるが、理解しすぎていて教師の話がつまらない。そしてしまいには攻撃的になる。3つ目の反応では、教師の教授に対して反応があり、それに答えようとする受容と従順が成立している。そしてこの状態がバランスのとれた反応である。デューイはこの3つ目の反応に対してのみ、教師と幼児との分かり合えるという相互作用が働くとしており、そしてこのような人間と人間との相互作用によって、はじめて本当の経験が生まれると述べている。

またデューイは「経験」とは「地理的な側面があり、芸術・文学的な側面があり、さらには科学的な側面もあれば、歴史的な側面があり、すべての連続した経験が同じ世界の同じ生活の種々たる側面から生まれるものである」と述べている。芸術論でもそうであったように、活動をする中ではじめと途中、そして終わりがある連続性のある経験は、人間の生きる日常生活から生まれるものであり、そして活動する過程が大事であるとされている。このように「経験」とは主体と環境との相互作用であり、幼児が住む現実の中から生み出されるものなのではないか。またこの経験論では活動の過程で困難や壁にぶつかることも述べられているが、生命の輝きは、困難な経験ほどより充実した人生が送れると感じるし、逆にただ楽しい、うれしいことばかりの経験は人間の人生を敗北に追い込むといっても過言ではないのである。

西洋哲学の研究者である巡政民⁹⁾はデューイの経験論から「人間的生活のすべての営みを「経験」という基底から理解しようとする立場は「教育」においてもそのまま適用されて行われなければならないし、経験の経験による経験のための教育ということが高潮されていくゆえんとして」と述べている。これは経験が幼児が経験するすべてのことを経験とするのではなく、あくまでも教師や幼児を取り巻く人間との相互作用が成立した連続性のある経験という意味だが、巡の述べるとおり、常に何かに興味を示すであろう幼児に対して、常にデューイの経験論からの経験を大事に幼児の姿を見守っていく必要があると考えている。そしてこの経験論は幼児期のみを示すのではなく、人間が生誕した時から生涯の過程として続けられるべきであるのではないか。

(3) デューイの表現論

「表現」という言葉は、さまざまな種類の芸術論において異なった解釈による概念がある。それは大別して、表現の「主観性」を重視した理論と、表現の「客観性」を重視した理論である。表現の主体性を重視した理論は、デカルトの提起した「経験の場」理論であり、主体と客体とが対立する二元論的解決論から起こっているとされる。これは事物を客観的に見る方法は唯一「観察」のみであり、それ以外の感情や感覚等は「主観的」に属し、客観的に直接かかわりのない感覚的現象に結び付けられる仮象や幻影が「表現」されるという理論である。一般的に表現とは自分の思っていること、考えていることを人間の持つ話す、動く、作るなどという機能を働かせて外部に伝えることとして考えられているが、そこで問題になるのが、表現の主体は主体者の感情なのか、それとも主体と客体の両方か、何か特殊なものか、それとも普遍かという問題にぶつかるのである。そこでデューイは表現について「経験としての表現」との見解を出しており、幼児の表現がどのように行われ、そしてなぜ表現活動が必要なのかデューイの見解に従って、探求してみたいと思う。

デューイは、教育の仕事について、教育原理の始めの根源は幼児の衝動的な要求、欲望、そして興味に存すると述べている。ここでいう衝動は本能として位置づけられている。

幼児教育現場において、ただ与えられた課題を活動に移す事が教育ではなく、本来であれば、幼児の本能、衝動に根源する社会的活動を通して行われなければならないし、幼児の自発性を大事にしなければならないものではないか。またデューイは学校で役立てられる衝動を次の4つに分類している。

第1に幼児の社会的本能 (social instinct of impulse) を挙げている。この社会的本能では、会話や人との交際、交じりと示されていえる。デューイは4, 5歳の幼児は発達的にも精神的にも無知なため、きわめて自己中心的であると述べている。そして幼児の興味は無限に拡大する可能性を有するとされており、言語本能は幼児の社会的表現活動の最も単純な形式である。したがって幼児は、日常の生活の中で育まれる会話などの交じりの興味が強く、この点では、言語は教育手段として最も重要なものとしている。

第2は製作の本能 (instinct of making) — 構成的本能 (constructive impulse) である。幼児にとって興味の強いものや、何かをやってみたいという衝動は、最初は遊戯、運動、身振り、物まね等がその表現として見出され、そして明確さが増すにつれて、具体的な物の製造に向かうとされている。また幼児は物や事物について興味をあまりもたないとされているが、構成的衝動性と会話的衝動性の結合されることによって、第3として事物について何かを発見していこうとする探求の本能 (instinct of investigation) が生じてくるとしている。

第4は表現的衝動 (expressive impulse) — 芸術的本能 (art instinct) である。これも社会的本能と構成的本能とから生ずるものとしている。また織物作業の例を挙げて、構成を適切にし、そ

れに社会的動機を与えれば、必ず芸術作品が生まれると述べている。

上記のような会話、コミュニケーションの関心、物を製作すること、探求の関心、そして芸術表現の4つの幼児の関心は、デューイによれば、自然の資源であり、投資されなければならない資本であるとしている。そしてこれらの論理に従うと、幼児の活動的成長は、これらの関心、興味を大事に行われる中で培われるものであると考える。

このようにデューイは、幼児には芸術的本能があること、また幼児の発達を考える時、この本能・衝動という能動的活動が必要であると述べており、その活動こそがデューイのいう芸術表現へとつながっていくのである。

4 デューイの芸術、経験、表現論の共通点

西田文夫⁹⁾が「芸術を遥かな台座のうえに安置しようという考え方は、非常に広く行きわたりかつ実に微妙に人々に浸透している。そのために洗礼され、強められた形の経験でもある芸術作品と一般に経験として認められている日常の事象や行動との間には、越えがたい障壁がもうけられている」と述べている。しかしデューイは(3)デューイの理論で指摘したとおり、現実を生きる日常生活の中に芸術を生み出そうとしている。少なくともデューイはそこに芸術の根源と芽生えがあると考えているのではないか。デューイの芸術論でも、計算すること、文字を書くことでもその過程の中で芸術的性質が宿っていれば芸術としているし、経験論でも日常の生活から起こる経験の中で、本当の経験を生み出そうとしている。そして表現も、幼児が日常の中で興味や関心を示し、それが幼児の本能となっていくことを述べている。デューイ反対派の中にはこの何でもかんでも日常の現実世界にのみ様々な哲学を述べるから間違っているという学者もいる。しかし、人間は生まれてから現実世界の中でしか様々な成長を遂げることができない。そしてまたこの現実世界が様々な人間自身の発達を促してくれるものとも考えている。つまり、芸術、経験、表現は切り離して考えるものではなく、様々な作品を作り上げる過程において、芸術があり、芸術を作り出す過程に経験があり、それを表現していこうとする本能があると筆者は考えている。この3つの共通点は、何度も言うように、現実世界で生きる中で生まれるものであり、そして芸術と経験においては、作品を作り上げる過程で様々な思いや苦痛を感じ、相互作用しながら育まれるものであると推測する。幼児にとっても、日常の生活の中でさまざまな興味・関心が生まれている。しかし幼児がこの興味・関心のまま行動をすることを許してしまえば、ただのわがままで自己中心的な幼児にしか育たない。そして人間として生まれたならば、人間としての教育を施していかなければ幼児の心身の発達はないのである。そこで、幼児教育における芸術表現の場が必要であると考え。この活動を幼児の心身の発達の為に行うもの、そしてただ発表のために行うものではなく、デューイの見解のような芸術、経験、表現活動を行い、この表現の中でどこまでも幼児の本能を引き出しながら幼児の心身の発達を促すためにさまざまな工夫をこらした芸術

表現を行うことができれば、必ずすばらしい幼児に成長していくことができると思う。このような理由から、幼児の芸術表現を行う場が必要であると考えられる。

5 終わりに

デューイの芸術、経験、表現論から幼児の芸術表現の必要性を述べてみた。芸術というのは非現実世界から生まれるものではなく、我々の生きる現実から生まれた芸術、経験が本能となって表現していくというデューイの理論は、筆者にとっては衝撃的であり、また感慨深く学ばせてもらった。それは芸術というのはどこか遠くの世界から出来上がるものであるという考えがあったからである。また小川がデューイの思想について「デューイの思想の中心は教育であり、その中心は美的経験的であると考えられるのは、個人と社会のように2分された諸事物を美的経験の中で再統一を行い、それによって、自己及び社会の改革を促そうとするからである」と述べている。幼児の芸術表現の必要性ももちろんデューイが提唱する「幼児の本能」から必要であると述べられるが、このような芸術表現活動が幼児の豊かな心を育てていくことができると考えているし、豊かな心をもつ幼児が増加することで、いまの日本の殺伐とした世の中を変革することが可能であると考えられる。

ある哲学者が芸術について「芸術は人間性の花である。芸術には、人間を蹂躪する蛮性や獣性に打ち勝つ力がある」と述べていたり、またハンブルグバレエのノイマイヤー監督が同じく芸術について「芸術には言語や人種の差異を超えた普遍的な力がある。そして表現者がいて、それを受け取る観衆がいる。頭での理解ではなく、良心や本能に訴え、感動や平和の心と呼び覚ます。ゆえに芸術にはあらゆる人々との魂の交流をもたらす偉大な対話の力がある」と述べている。少し長くなったが、出来上がった絵画やバレエ、音楽演奏を芸術だとしてしまえば、上記のような芸術についての意見は出てこないであろう。なぜならば、人々に感動を与えることができる芸術とは、デューイのいうとおりの作品を作り上げる過程において、様々な困難や壁にぶつかりながら作品を作り上げていくからである。

幼児にとっては少し難しいと思われるかもしれないが、幼児の発達に合わせたこの芸術表現を行う意義はあるし、幼児に芸術、経験、表現をさせていくことは、幼児のもつ様々な可能性を開いていくきっかけにもなっていくと考える。

筆者の指導教授からは、デューイについてはまだまだ学ぶべきことがあるとの指摘があった。そして偏った哲学を述べてはいけないとも言われている。しかし「なぜ幼児に表現活動が必要なのか？」という疑問に対し、デューイは「それは幼児自身の本能であるから」と明確に答えている。幼児教育の場において、様々な芸術表現活動が行われている中で、幼児の本能から表現活動が必要であるというデューイの理論は、これから様々な表現についての疑問にぶつかっていくであろう筆者にとって、表現に対する論理的な展開に結びつける一つの枠組みとなってくれるもの

と思う。

今後はこのデューイ理論をもとに、実際に行われている幼児教育における芸術表現についての理解を深めていきたい。

参考・引用文献

- (1) J. デューイ 学校と社会 (宮原誠一訳) 岩波文庫 pp. 54-58 pp. 91-92 pp. 134-135
2002年
- (2) J. デューイ 哲学の改造 (清水幾太郎・清水禮子訳) 岩波文庫 pp. 134 2001年
- (3) J. デューイ 民主主義と教育 (松永安男訳) 上・下 岩波文庫2004年
- (4) J. デューイ 学校と社会・経験と教育 (河村望訳) 人間の科学社 pp. 42-43 2000年
- (5) J. Dewey "Democracy and Education" The Free Press, pp. 135, 1966
- (6) 小川哲生「J. デューイの教育論・芸術論の研究Ⅱ～表現活動を中心に～」明星大学教育学研究紀要 1994年
- (7) 巡 政民 デューイ研究 春秋社 pp. 87 1965年
- (8) 西田文夫 デューイ教育学の構造 お茶の水書房 p. 251-267 1964年
- (9) 鯉坂二雄 デューイの教育学 玉川大学 pp. 13 1963年